

Gymnocalycium pseudoragonesei (和名 紫冠玉)

2007.12.20

島田壽男

1990年8月に発行された、ギムノ愛好会編纂の、ギムノカリキュムハンドブックのNo.18に *Gymnocalycium ragonesei* Cast. が紹介されている。しかし、写真で紹介されているのは、現在売られているラゴネシーではない。*Gymnocalycium pseudoragonesei* (和名 紫冠玉)である。この間違いは、やむをえない事情にある。この事情に関連して、1983年の KuaS 34 (4) : 90に Franz Strigl 氏の投稿記事があるので。紹介してみたい。

「*Gymnocalycium pseudoragonesei* は 1960年代に、我々のコレクションに登場した。Schütz 博士によれば、“この種は以前 *Gymnocalycium ragonesei* として広く普及していた。しかし、本物の *Gymnocalycium ragonesei* が最発見された時に、この植物は暫定的な名前



写真 1 ; *Gymnocalycium pseudoragonesei*

Gymnocalycium pseudoragonesei があてがわれた。尤も、誰がそれに、この名前を与えたかは私には分からない。” 2つの種は、種子の形状から、下屬 *Trichosemneum Schüetz* に属する。私の、*Gymnocalycium pseudoragonesei*の最も古い植物は1967年の播種に由来する。その種子を私は、アルゼンチン人の Fehser 氏から手に入れた事はまず間違いない。今日、この実根の植物は、おおよそ、高さ 3cm に対して直径 6cm を持つ。一方、接木された植物はおおよそ、直径 9cm ある。すべての個体は、非常に画一的な外観を持つ。；その胴体の色は風変わりの灰緑色。稜の総数は 20 個から 23 個まで変動する。完全に扁平になった稜は、殆ど幅 1cm ない。その上には、約 1cm 間隔で、大きさ 2mm の刺座が載っている。稜は刺座の上にある、横溝により、相互に分離されている。各刺座には 3 本から 5 本の刺が現れる。刺は長さ 1cm にもならない、側方と下方に向かう。刺には黒い基部が伴っている。私は、中刺を今までの所、1 本も観察できていない。花は白色で、スリムな花卉 (Büldenblätter) を持つ。外側の総苞 (Hüllblätter) のみ茶緑色を示す。花筒部はおおよそ 2cm の長さを持つ、そして、*G.ragonesei* あるいは *G.stellatum* のように、刺座に向って、先が尖らないで、おおよそ太さ 6mm の同じ大きさで刺座に向う。頭頂部はいつも、幾分窪んでいて、刺が無い。本来、*Gymnocalycium pseudoragonesei* は、私の、ギムノカリキュム種がたくさんコレクションの中でも全く別の植物と混同される事はない。それでも、ピルツ氏の、採取番号 131 を持つ、*Gymnocalycium bodenbenderianum*(訳者註；現在は、*G. occultum* とされている)と似ているように私には思える。」とある。

この種は一時期ヨーロッパで、*G.ragonesei* として混同され、広く流通していたため、日本でも、この種が *G.ragonesei* として誤って紹介された。従って、ギムノハンドブックでも、*G.pseudoragonesei* が *G.ragonesei* として紹介された。両者の決定的な違いは、F.Strigl 氏も指摘しているように、花筒部の形状である。*G.ragonesei* は花筒が刺座（花の付着点）に向かって、先細り（円錐形）になっているのに対し、*G.pseudoragonesei* は付着点まで、同じ太さ（円柱形状）である。

F.Strigl 氏は、記事の最後に、この種はあまり多くコレクションの中に見出されない。ギムノカリキウムには飽くことなく追求して、手に入りたい多くの珍品が存在する。誰が、手入れの容易な、白い花のギムノカリキウム種にもう興味を持つだろうか？と結んでいる。しかし、私は渋くていい種だと個人的には思っている。

最後に、学名の *G.ragonesei* と *G.ragoneseii* の 2 種類の表記が文献に現れているが、学名は、発見者の名前 Ragonese に因んで命名されている。こういう場合には、国際植物命名規約 (ICBN) に拠れば語尾は "ei" が正しい。(勸告 60C)



写真 2 ; *G.ragonesei*